

日本とロシアの地図に見られる カミの国土

著者	ポロヴニコヴァ エレーナ
雑誌名	日本思想史研究
号	48
ページ	38-55
発行年	2016-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123220

日本とロシアの地図に見られる〈カミの国土〉

ポロヴニコヴァ・エレーナ

はじめに

前近代の世界観は、超人間的な存在・カミ⁽¹⁾なしでは考えられないものである。広い意味での「世界」を構成するのは、われわれ人間だけでなく、カミでもある。そして、そのカミの住む領域はたびたび「世界」を表現する地図類に描かれていた。

近世日本を例に言えば、宇宙的な広がりとしての「世界」を表した「須弥山図」や「地底鯨之図」などには、カミの住む世界も明示的あるいは暗示された形で描かれている。それらは大雑書などの書物を通して、一般庶民に至るまで広く近世社会に流布しており、当時の世界観を表現しているものである⁽²⁾。

このような地図類は基本的に、中世から受け継がれてきた仏教系世界観に基づいているものである。海洋や山々の真ん中に、様々な天神の住む巨大な須弥山があり、外海には四大州が浮かんでおり、その一つである南瞻部洲（南閩

浮提）がわれわれ人間の住む世界である、というような認識は、中近世の人たちにとって一つの常識だったと考えられる。

同じ時期のヨーロッパではキリスト教の世界観に基づく地図類が盛んに作成されていた。このような地図においては必ずと言っていいほど、東方には楽園・エデンの園が描かれており、さらに東の方——地図の枠外——には死後に行ける天国が描写されることがある。このような「世界」認識は中近世のヨーロッパでは一般的なものであったのである。

このように、東西には類似した世界観を基に、〈カミの国土〉を描き込まれた地図類が作成されていた。ここでいう〈カミの国土〉とは、死後に行けるような極楽や天国はもちろん、「この世」のどこかにあるが、誰でも行けるようなものではない土地（＝聖地）でもある。〈カミの国土〉

はいわば、一種の宗教的観念であり、宗教的世界観を反映する地図には必ず何らかの形で表現されるものである。

本稿は、仏教系世界観とキリスト教世界観の地図において、〈ヘカミの国土〉⁽⁴⁾がどのように描かれていたかを説明することを目的とするものである。その際、近世日本とロシアの地図を資料とする。両国の地図の比較を通して、東西——とりわけ日本とロシア——の世界観の共通点と相違点を明らかにし、近世の世界観はいかなるものであったかについて考察したい。

日本の事例としては、『南閩浮提諸国集覽之図』(横浜市立大学学術情報センター所蔵)を取り上げる。本図は鳳潭の『南瞻部洲万国掌葉之図』(宝永七(一七一〇)年刊)の普及版である。鳳潭の図と違って、『南閩浮提諸国集覽之図』は地名や説明文などが全て仮名書きであり、仏教系世界観を庶民向けに紹介するという目的で出版されたと考えられる。

他方、ロシアの事例としては、ロシア国立図書館所蔵の『Книга глаголемая космография переведена бысть с римскаго языка в ней описаны государства и земли и знатные острова и в которой части живут какие люди и веры их и нравы и что в которой земли родится и о том значит в сочиненном ⁽⁴⁾окрузе сем』(『ローマ語から訳されたコスモグラフィアと

いう書。ここでは国々や土地や知られている島々、様々な大州に住む人間やその信仰や風習、様々な土地の特産などが記載される。それ全てがこの円形に書かれる』。以下ではその略称・『コスモグラフィア』とする)を用いる。『コスモグラフィア』は、一六七〇年に作成された *Космография, сиречь описание сего света земель и государств Великих* (『コスモグラフィア、即ちこの世の土地や大国の説明』) という地理書⁽⁵⁾を基に十八世紀に作られた地図であり、ルボーク(民衆版画)として広く流布したものである。この地図はいわゆるTO図と同様にキリスト教世界観を庶民に紹介するために作成されたと考えられる。

『南瞻部洲万国掌葉之図』も『コスモグラフィア』も、同名図が何点が現存している。前者のほうは四点ほど⁽⁶⁾、後者は五六点ほど⁽⁷⁾知られている。いずれの地図も庶民向けに作成されて庶民の間で流布したものであり、日本とロシアの世界観を比較するために有用な資料である。

管見では、この二つの地図の比較研究は皆無であり、その解説でさえ資料紹介のみにとどまっており、詳細な考察がほぼなされていない⁽⁸⁾。ロシアの『コスモグラフィア』⁽⁹⁾に関して言えば、G. V. ノンフスキー・A. T. フォメンコによつて多少の解釈が行われているが、それはかなり独特なものであり、疑問に思われるところも少なくない。

そこで本稿では、〈カミの国土〉・聖地の描写に特に着目しながら、日本とロシアの世界観の同異について考察する。まずは『南閭浮提諸国集覧之図』の解読を行いながら、ここに見られる世界観について検討する。次に、『コスモグラフィア』に表現される世界観の解明を試みる。この二つの地図の比較から何が見えてくるのかを検討したうえで、今後の思想史研究の方向性を考えていきたい。

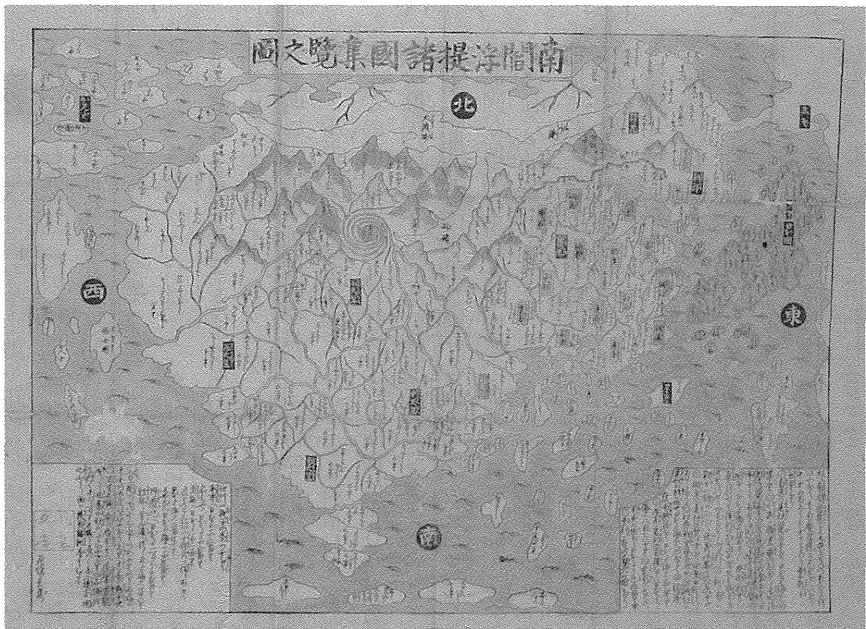
一、『南閭浮提諸国集覧之図』とそこに描かれる聖地

『南閭浮提諸国集覧之図』（図一）は前述したように、鳳潭の『南瞻部洲万国掌菓之図』の普及版である。鳳潭の地図と同様に、われわれ人間の住む南閭浮提（南瞻部洲）のみが描かれるものであるが、その北方には須弥山があると暗示されている。それは地図の右下の説明文からも明らかである。

夫南閭浮提とはしゆみせん（そなんふだい）の南のかたをいふなり、
其南閭浮提に大國十六あり、中国五百あり、小國十千
あり、粟散國は無量なり、
この地図を見た人たちは、我々の住んでいる世界の北方

においてカミのいる世界＝須弥山があると認識していた。これは当時の常識だったと言って差し支えない。

以上の説明文からも窺われるように、人間の住む世界＝



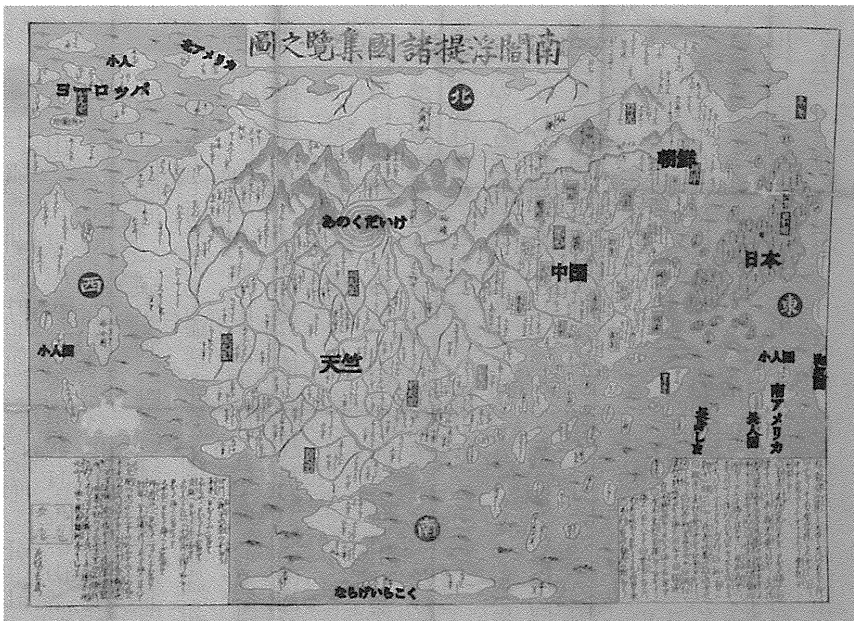
図一、『南閭浮提諸国集覧之図』、延享元（一七四四）年以降刊、横浜市立大学学術情報センター蔵

南閩浮提は数多くの国からなる。「世界」の中心は五天竺に分かれる天竺（インド）にあり、それは世界の大部分を占めている。「唐土（中国）」「日本國」などのその他の国々は天竺の周りに描かれている。

従来 of 三国世界観と違って、『南閩浮提諸国集覽之図』においては、ヨーロッパや北アメリカ（「きびら」）や南アメリカも描かれている（図二）。このように見ると、『南閩浮提諸国集覽之図』は、アフリカのほうがはつきり描かれていないにもかかわらず、近世日本に知られるようになった五大州からなる「世界」の地図だと言える。

また、この地図においては、「小人国」「ぐぬこく（狗奴国）」「毛人国」「長身しま」「ならげいらこく（那羅菩羅国）」「人三尺、人身にて鳥のくちばし」などの不可思議な国々も数多く描かれており、しかもこのような国々は多く「世界」の果てにあたるどこに見られる。本地図は中心から果てへ、仏教の発祥地である天竺から不可思議な異人の住む世界へ、というように同心円的な構成をなす。それは近世日本に流布した他の世界図と同様である。

「日本國」の描写には注目が必要である。「日本國」は仏教系世界観通りに「世界」の東方にあると描かれているが、本図においては茶色に染まっているのである。この地図には■ごとの色分けが見られないため、色塗りされる「日本



図二、『南閩浮提諸国集覽之図』（トレース図）

一見では、『南閻浮提諸國集覽之図』においてカミの住む世界が描かれていないようである。しかし、この地図には仏教の聖地（聖地）が描かれている。それは「あのくだいけ（阿耨達池（阿耨達池））無熱惱池」である。

仏教系世界観が書かれている『俱舎論』では、次のよう
な記述がある。

頌曰。

此北九黑山ノニノアリ 雪香醉トノニ 山内ノニ 無熱池アリ 縱廣 五十踰

論^{シテ}曰。此贍部洲^リ從^リ中^テ回^ニ北。三處^々各有三重黑山。有大雪山。在黑山北。大雪山北有香醉山。雪北香南有二大池水。名無熱惱。出四大河。一踰伽河。二信度河。三徙多河。四縛芻河。無熱惱池。縱廣正等^{ニシテ}。面各五十踰繕那量。八功德水盈滿其中。非得通人無由能至^ニ於此池側有贍部林。樹形高大。其果甘美。依此林故名贍部洲。或依此果以立洲號^一。

山奥には無熱惱池があり、そこから四つの大川が流れていく。無熱惱池は八功德水があり、「得通人」でなければ池まで辿り着くことができない、という。

このような無熱惱池は聖なる湖であり、チベットにあるマナサロワル湖と比定されている。これこそは『南國浮提摩諸国集覽之図』や仏教系世界図に描かれる「カミの国土」である。

『南閩浮提諸國集覽之図』においては、「あのくだいけ」と四つの川だけが描かれる。その四つの川の名が書かれていないが、一般的にはガンジス川（「旻伽河」・インダス川（「信度河」）・ヤルカンド川あるいはタリム川（「徙多河」）・アムダリア川（「縛羯河」）とされている。⁽²⁾ いずれの川も池

を右回りに一周してそれぞれの方向——東西南北——に流れていき、われわれ人間の住む南閻浮提（南瞻部洲）を潤すのである。言い換えれば、「あのくだいけ」は全世界の水源地であり、だからこそ聖地である。

本図には『俱舍論』の記述に見られる高大な瞻部林が見られない⁽²²⁾。しかし、一般庶民が寺院などで仏教の教義を聞くことができ、仏教系世界観について知ることでもできた。そのため、『南閻浮提諸国集覽之図』やそれに類似した地図を見た一般人は「あのくだいけ」の表記と四つの川だけで、仏教で説かれる無熱惱池を中心としたこの聖地の全体像——簡単に辿り着くことができない池・世界を潤す四つの大川・池の側にある瞻部林——を思い浮かべるのではないかと考えられる。

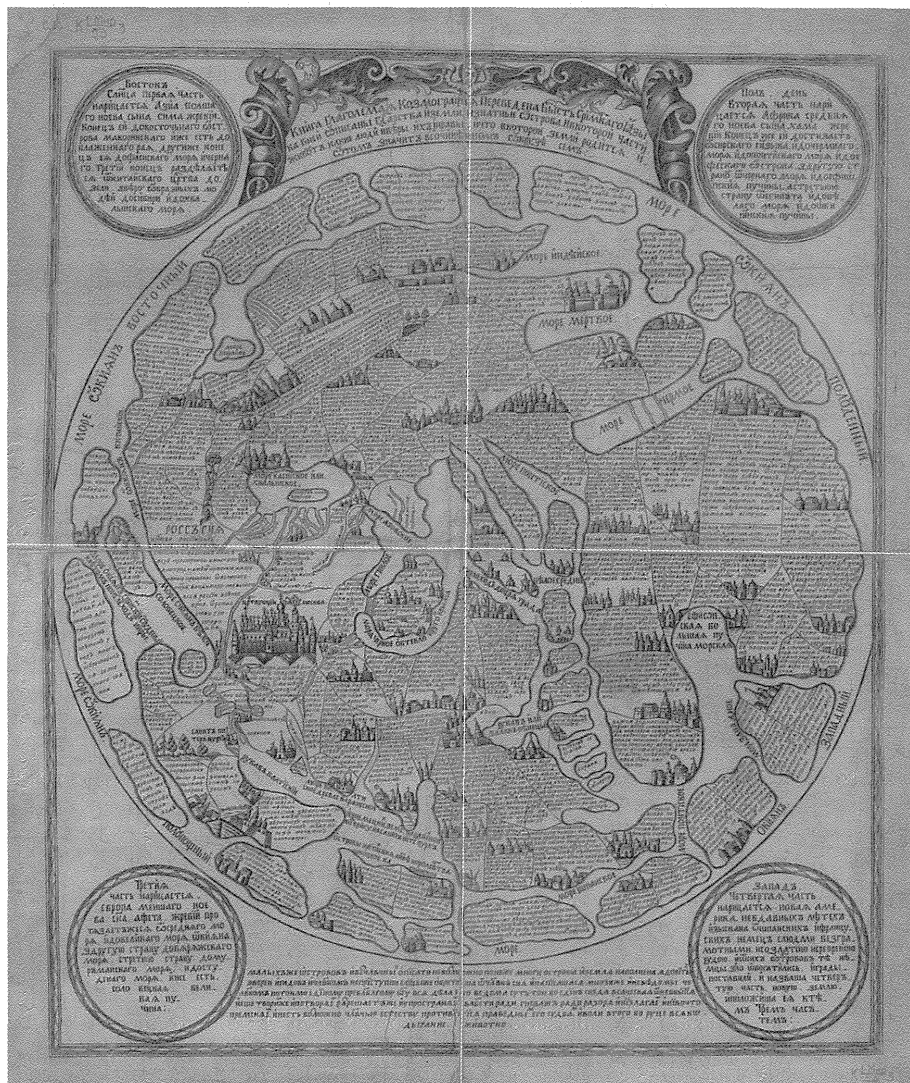
以上のように、『南閻浮提諸国集覽之図』においては、「北天竺」のさらなる北方に広がる山奥に、仏教で説かれる聖地があると描写されている。この聖地は、定方晟によつては「理想郷⁽²⁴⁾」と、応地利明によつては「樂園⁽²⁵⁾」と名付けている。言い換えれば、阿耨達池＝無熱惱池とは仏教で説かれる「この世」の樂園であり、「ヘカミの国土」である。

二、『コスモグラフィア』とその「ヘカミの国土」

前節で検討してきた『南閻浮提諸国集覽之図』とほぼ同

じ時期にロシアで作成され流布したのは『コスモグラフィア』という地図である（図三）。これはいわゆるT O図である。しかし、中世ヨーロッパで流布したT O図が『コスモグラフィア』の直接の原拠とならなかったようである。ロシアの地図の原拠となったのはG・メルカトルの地図帳⁽²⁶⁾やM・ベルスキーの歴史書などを基に書かれた『コスモグラフィア』、即ちこの世の土地や大国の説明（一六七〇年）である。地図の正式名にある「ローマ語から訳された」というのは、一方ではT O図がローマ時代まで遡り、その多くは基本的にラテン語で書かれたものであることに、他方では地理書『コスモグラフィア』の原拠として使用されたメルカトルの地図帳がラテン語本であったことに由来しているのではないかと考えられる。

『コスモグラフィア』に見られる世界観は多く、『聖書』とりわけ『旧約聖書』によるものである。「創世記」では、全世界の人々はノアの三人の息子セム・ハム・ヤフエトの子孫であるという。後の解釈ではセムの子孫はアジアに、ハムの子孫はアフリカに、ヤフエトの子孫はヨーロッパに広がったとされ、これは中世のT O図にも記載されることになる。『コスモグラフィア』にも、各大州の説明文——地図の枠外——はその旨が記載されている。地図の左上には、「太陽の東方。第一大州はアジアという。ノアの



図三、『コスモграфия』、十八世紀、ロシア国立図書館蔵

長男・セムの割当である。(後略)^②と、右上には「南方。第二大州はアフリカといい、ノアの次男・ハムの割当である。(後略)」と、左下には「第三大州はヨーロッパといい、ノアの三男・ヤフェトの割当である。(後略)」とある。

『コスモグラフィア』(図四)においては、全てのTO図に共通しているヨーロッパ・アジア・アフリカの三つの大州に、新大陸であるアメリカが加わって、四大州からなる「世界」が表現されている。さらに、犬頭人の島やバシリスク(上半身は人間で下半身は蛇で、顔は女性)の住む島などがあり、「世界」の果てには異形の者が住むという認識が窺われる。地図上には、各国や様々な地域などに関する説明文が書かれており、都市や川・山などのマークが付けてある。

地図の中心にあるのはヨーロッパのTO図と違って、エルサレムではなく、黒海とボスポラス海峡(地図では「ツアリグラード^③までの海峡」あたりである。それは、新大陸・アメリカを描くために、「世界」の中心であるエルサレムの地が地図上の中心からやむを得ずずれてしまったのではないかと考えられる。

他方、本図においては、「ロシア」及び「帝都モスクワ」が大きく書かれている。このような描写から、「ロシア」や「帝都モスクワ」こそは「世界」の中心と言わないまでも、

「世界」に一番優れているところだという認識が窺われる。これはエルサレムとロシア・モスクワの説明文からも明らかである。まずエルサレムについての文を見ると、

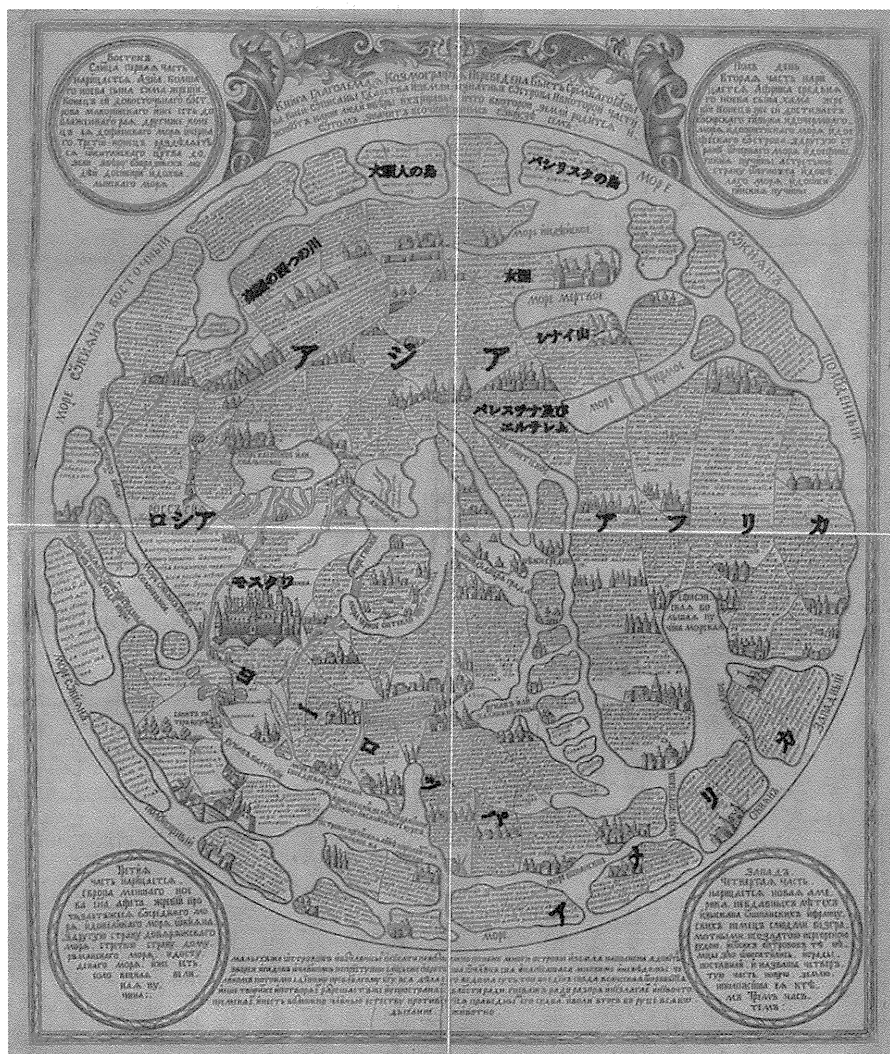
南方。パレスチナ大国。そこには神様に愛される聖なる都市・エルサレムがある。メルキゼデク王が建てた。その後、サウル王やダビデ王が君臨していた。ソロモン王は(エルサレムで)至聖所を設けた。(中略)人はユダヤ人で不道德であり、各国に分散している。「この国には」あらゆる言語やあらゆる信仰を持つ人が住んでいる。トルコ国(王)に貢物をする。総主教及び修道院が尊敬すべきもので、今日にいたるまで信心深い。

とあり、本来は聖地であるが、今日は、教会側の方は以前のまま信心深い、国民は不道德で、エルサレムのあるパレスチナ国自体はトルコに貢物をする、という。

それとは対照的に、ロシアとモスクワの説明文では、

ロシア。モスクワ主権のロシア国は東方と北方にある。広大で人口が多い(国である)。都市は石造と木造である。六四九六年に、西暦紀元後の九八八年に、全ロシア及びキエフ大公・ヴラジーミルにより、「この国が」キリスト教化された。

帝都モスクワ。今日にいたるまでは、信仰心が使徒教



図四、『コスモグラフィア』(トレース図)

父や全地公会の聖師父の伝えている通りである。教会はあらゆるコーラスをもつて、おだやかで壮麗である。

(後略)

とあり、今日でも人々の信仰心は衰えることがないのである。これは以上の「パレスチナ」の文にもその他の国に関する説明文にも見られないものである。つまり、衰えることのない信仰心は『コスモグラフィア』における「ロシア」国の特徴だと言える。信仰心を重視するキリスト教的な見方で、「ロシア」のほうは「世界」に一番優れている国だという認識が発達してきたのではないかと考えられる。だからこそ、本図において大きく取り上げられているのは、従来のTO図での「世界」の中心であるエルサレムではなく、以前のまま神様の教えを守っている「ロシア」やその「帝都モスクワ」である。

さて、『コスモグラフィア』においてはヘカミの国土に聖地がどのように描かれていたのか。ここでは、二箇所注目したい。

まずはシナイ山である。地図には三つの山が描かれており、「アラビアのシナイ山。ここはモーセが神様より十戒や契約の書を授かり、燃えつきない柴を見た。そこには司祭たちが裸足になって祈禱を執り行う。」という説明文が書かれている。これは『旧約聖書』の記述を踏まえたもの

である。

シナイ山は「聖なる土地」⁽³⁵⁾である。また、「出エジプト記」に書かれているように、この山に一般人が登ってはいけない⁽³⁶⁾という意味でも、シナイ山は聖地でヘカミの国土である。前節で検討してきた『南閩浮提諸国集覧之図』の聖地描写との関連で着目されるのは、『コスモグラフィア』におけるもう一箇所のヘカミの国土である。それは「樂園の四つの川」である。アジア大州の東方には四つの川が描かれ、次のような説明文が書いてある。

ここ東方の近くに、樂園の四つの川が出るところがある。以前、創生よりはその川が樂園から流れ出ていった。創世記に曰く。四つの大川を創った「神様」が「それら川に」名を与えた。第一の川の名はチグリスで、第二の川はユーフラテスで、第三はナイルで、第四はピシオンである。川に沿って樂園まで辿り着くことはできない。

これも『旧約聖書』の記述⁽³⁷⁾を踏まえたものである。一般の人たちの認識では「創世記」の通り、アダムとイブの追放後、樂園・エデンの園は人間が入れないように、智天使ケルビムときらめて回転する炎の剣によって守られているものなのである。このような認識は古代・中世ヨーロッパにおいて、『ニコデモ福音書』⁽³⁸⁾とともに生まれて広く流

布したセトの伝説にさらに強調されてきたのである。

しかし、『コスモグラフィア』の以上の記述には「入れない」のではなく、「辿り着くことができない」とあり、そこには中世以来の「世界」構造が反映されていると考えられる。中世ヨーロッパでは、四つの川が樂園を出て地下を流れていき、それぞれの場所で再び地上に現れると認識されており、それはたびたび地図類にも描かれていた。⁽¹⁾『コスモグラフィア』にも同様な構造を見ることができるのである。本図においては、人間の住む大地が大洋に■まれており、樂園の四つの川は一方は大洋とつながっており、他方は地下に流れていく、と描かれている。ただし、樂園の四つの川が具体的にどの辺に再び地上に現れるのか、はっきりされていない。

『コスモグラフィア』の説明文には書かれていないが、「創世記に曰く」と出典が明記されることから、四つの川が流れていく樂園に対する認識は『旧約聖書』とさほど変わらないと考えられる。つまり、「エデンの」園の中央には、命の木と善惡の知識の木が生えており、「エデンから一つの川が流れて出て」、「園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた」ということである。樹木と一つの水源をもつ四つの川というような要素は、前節で述べた『南閭浮提諸国集覽之図』に表現されるヘカミの国土と同様である。

おわりに

——日本とロシアの地図の比較から見えてくるもの——

以上、日本とロシアの地図に描かれるヘカミの国土について考察した。

『南閭浮提諸国集覽之図』と『コスモグラフィア』はほぼ同じ時期に刊行され、庶民の間でも広く流布した地図である。いずれも十八世紀に作成されたものであるが、そこに表現される世界観は十八世紀当時のものだけでなく、中世から受け継がれたもので、もっと広く言えば、前近代の宗教的世界観である。

両方の地図において、「世界」の中心にあるのは、それぞれの宗教の発祥地とでも言える地域である。日本の図には五天竺からなる天竺（インド）であり、ロシアの図にはエルサレムである。ただし、中世に知られなかった「世界」——日本の場合はヨーロッパ・アメリカ等の国々で、ロシアの場合はアメリカの新大陸などである——も以上の二つの地図に描かれることで、「世界」の中心地も多少ずれていく。それは特にロシアの『コスモグラフィア』に著しく見られるものである。

また、『南閭浮提諸国集覽之図』と『コスモグラフィア』においては、従来の宗教的な「世界」の中心より、むしろ自国——それぞれの場合は「日本國」と「ロシア」——の

ほうが強調されているのである。自国のほうは「世界」で一番優れている国だ、という認識は十八世紀となると、洋の東■を問わず発達してきて一般庶民の間でも次第に流布することになる。これこそは、中世的な世界観から近世的なものへの展開である。

このように見ると、両方の地図では宗教的な要素が薄くなつていくかのである。しかし、実際はいずれの図においても、「俗」なる「世界」のみが表現されているわけではない。これら地図には宗教的な要素として聖地、言い換えれば「ヘカミの国土」が描かれているのである。

『南閭浮提諸国集覧之図』における「ヘカミの国土」は「あのくだけけ（阿耨達池＝無熱惱池）」である。天竺の北方には池とそこから流れていつて全世界＝われわれ人間の住む南閭浮提（南瞻部洲）を潤す四つの川が描かれている。この「あのくだけけ」の側に高大な瞻部林があり、この聖地までは簡単に辿り着くことができないことは、寺院等で行われた仏教の教義で一般庶民も知ることができたと考えられる。それ故に、『南閭浮提諸国集覧之図』を見た人たちは、「あのくだけけ」辺りが「この世」の楽園だと認識することに至ったのである。

同様に、『コスモグラフィア』にも「ヘカミの国土」が描かれている。以上の日本の地図との比較で特に注目される

のは、東方にあるという「楽園の四つの川」である。『南閭浮提諸国集覧之図』と似たように、四つの川と簡単な説明しかない。しかし、『コスモグラフィア』に描かれる宗教的世界観は『聖書』に基づいているものであり、一般庶民はこの「ヘカミの国土」の全体像——樹木・一つの水源をもつ四つの川・人間がそこに辿り着くことができないことなど——を教会等における教義で知ることになったのである。

ここで改めて留意したいのは、日本とロシアの地図では、また両国の世界観では、類似したような聖地・「楽園」に対する認識があったことである。その位置こそ——日本の場合は北方で、ロシアの場合は東方——が異なるが、「ヘカミの国土」には樹木があり、一つの水域——池あるいは川——がある。さらに、そこから四つの川が流れていき、全世界——われわれ人間の住む「世界」——を潤すこと、一般人がこのような「ヘカミの国土」まで辿り着くことが不可能であることなども、両国の認識では共通である。

「あのくだけけ」や「楽園の四つの川」というような聖地は、重懷の『五天竺図』（貞治三―一三六四）年作成）やヘレフォード図（一三〇〇年頃作成）などの中世の地図にも描かれていた。ただし、中世の図においては、そのような「この世」にある聖地と同時に、究極の聖地（死後に行

ける極楽・天国」も描写されており、中世的な世界観ではそのような認識不可能な場所にあったもののほうが重視されていたのである。他方、本稿で取り上げた近世の地図では、死後の世界が描かれず、「この世」(われわれ人間の住む世界とそれと連続した聖地)に焦点が置かれている。近世日本とロシアにおいては、死後の世界のリアリティが全くなくなったとは言わないまでも、「この世」のほうがクローズアップされるようになったのである。これは、中世と近世の世界観の相違点の一つである。

以上のことから、前近代の世界観は洋の東西を問わず、その基本が共通していることが明確である。それぞれ仏教とキリスト教の世界観を表現する日本とロシアの地図においては、宗教が異なるものの、宗教的な要素(ヘカミの国土⁽³⁾の描写)が酷似している。それだけでなく、中世から近世的な世界観への展開の一つとして捉えられる自国の強調(自己認識・自国認識)も、同じ時期に作成された両国の地図においては共通している。

本稿では、日本とロシアの二国に限定して考察を行ってきたが、世界各地の認識は共通するような基礎を持ち、時期を同じくして似たような展開を迎えたのではないかと考えられる。今後の思想史研究では国際比較という方法を積極的にとる必要がある。そうすることによって、それぞれ

の世界観の独自性をより具体的かつ立体的に把握することが可能となると考えられる。また、世界各地の認識の比較を通して、日本思想史やロシア思想史などの各地域のものを越えた、新たな「世界」思想史研究ができるのである。本稿はその一試みであり、また今後の第一歩である。

註

(1) 日本の「神」と区別するために、超人間的な存在・超越者としての広義の神を指す場合は、学界で使われている「カミ」と表記する。小松和彦『神々の精神史』(講談社、一九九七年)、佐藤弘夫『ヒトガミ信仰の系譜』(田書院、二〇一二年)など。

(2) 大雑書の「須弥山図」と「地底鯨之図」については、拙稿「大雑書に表現される「世界」観——「須弥山図」と「地底鯨之図」を中心に——」(『日本思想史学』第四六号、二〇一四年)で考察した。

(3) 日本歴史学で定着した時代区分(古代・中世・近世・近代・現代)は厳密に言えば、ロシアやヨーロッパの時代区分と一致していない。一般的には、「近世」は英語で「early modern period」と訳され、また英語の「early modern」は日本で「近世」と訳される。しかし、正確に言うくと、西洋史の「early modern」は「近代初期」であり、その時代範囲も十五世紀～十六世紀から十八世紀後半～十九世紀初頭まで

となっており、日本史の「近世」と必ずしも一致するのではない。ロシア史の時代区分に関しても同様である。

しかし、歴史もそうであるが、思想的な動向を見ると、それぞれの国・地域の認識では共通点・類似点を見出すことができる。世界各地の世界観・思想が類似したような形で展開されるため、思想史研究では時代区分を捉えなおす必要があると考えられる。それは今後の課題とするが、本稿では仮に日本歴史学で定着した時代区分を用いる。

- (4) 本稿では、原則としてロシア語表記には旧字を用いないとする。ロシア語資料の日本語訳はことわりのない限り、筆者によるものである。

- (5) 同名の地図と地理書を区別するために、本稿では地図『コスモグラフィア』は単に『コスモグラフィア』と、地理書は地理書『コスモグラフィア』と呼ぶ。

- (6) 一点は延享元（一七四四）年刊と明記される内閣文庫所蔵本である。二点は横浜市立大学学術情報センター所蔵本で「延享元後印」とされている（「横浜市立大学所蔵の古地図データベース Database of Historical Maps in the Yokohama City University Collection」〈URL: http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/pages/WC-0_118.html?l=∓n=153 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/pages/WC-0_119.html?l=∓n=154 二〇一六年六月七日閲覧〉による）⁶⁾。この三点は花坊兵蔵によって刊行されたものであるが、三点の間は色分けの有無や刊記の書き方などの相違点が見られる。もう一点は同じく横浜市立大学学術情報センター所

蔵本であるが、日本や中国の描き方・地名の増補・外国船の図の挿入などの相違が見られ、上記三点の江戸末期刊の改訂版である。本稿で資料として用いるのは「延享元後印」とされる一図である。

- (7) L. バグロフは、D. ロヴィンスキーの『ロシア民衆絵画』には五点の同名図について言及されるといい、その五つと異なるヴィリニウス大学所蔵本を紹介する (L. Bagrow, "An old Russian world map", in *Imago Mundi*, No. 11, 1954, p. 170)。本稿で用いる図は L. バグロフの紹介するものと異なるものであるが、D. ロヴィンスキーの言及する五点と異なるかどうかは、不明である。筆者が参照した一九〇〇年刊の D. ロヴィンスキーの『ロシア民衆絵画』(Ровинский Д. Русские народные картинки. СПб., 1900) は L. バグロフの参照した一八八一年刊本の後版であり、そこには五点の『コスモグラフィア』について言及されず、一点（本稿で取り上げる図と異なるもの）しか載せられていない。

なお、ロシア国立図書館には、筆者が取り上げる図のほかにもう一点の『コスモグラフィア』が所蔵されている。それは D. ロヴィンスキーが一九〇〇年刊に紹介している図と類似しているが、色分けされているので違う一点である。

- (8) 『南閩浮提諸国集覧之図』に関しては、開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識——世界地理・西洋史に関する文献解題——』（乾元社、一九五三年）、室賀信夫・海野一隆「江戸時代後期における仏教系世界図」（『地

理学史研究』第二集、一九六二年）、織田武雄・室賀信夫・海野一隆『日本古地図大成——世界図編』解説（講談社一九七五年）、海野一隆『地図の文化史——世界と日本——』（八坂書房、二〇〇四年）、川村博忠『近世日本の世界像』（ぺりかん社、二〇〇五年）、金田章裕・上杉和央『地図出版の四百年——京都・日本・世界——』（ナカニシヤ出版、二〇〇七年）、同著『日本地図史』（吉川弘文館、二〇一二年）、横浜国立大学戦略的研究プロジェクト編『古地図——地球のかたちと万国の大地——』（横浜国立大学貴重資料集成Ⅱ、横浜市立大学、二〇一三年）など。

『コスモグラフィア』については、L. Bagrov, "An old Russian map" (op. cit.); Ровинский Д. Русские народные картины (указ. соч.); Носовский Г. В., Фоменко А. Т. Римско-русская карта мира XVIII века «Космография» не вписывается в скалиперовскую версию истории, но хорошо согласуется с новой хронологией (G. V. Носовский · A. T. Фоменко「十八世紀のローマ・ロシアの世界図『コスモグラフィア』がスクリジェの歴史観に当てはまらないが、新年代学と矛盾しない」）// Носовский Г. В., Фоменко А. Т. Крещение Руси (G. V. Носовский · A. T. Фоменко「ロシアの洗礼」), M., 2006 など。なお、日ロ国立図書館交流実行委員会編の『ロシア国立図書館所蔵地図展——18・19世紀——』展示会目録（国立国会図書館、一九九五年）には、『コスモグラフィア』が画像として載せられているが、何の説明も記されていない。

(9) Носовский Г. В., Фоменко А. Т. Указ. соч.

(10) 本稿ではことわりのない限り、読点・下線部は筆者によるものである。

(11) 具体的には、「こるくんでや（グリーンランドか）」「いすらんてあ（アイスランド）」「いんけれす（イギリス）」「うむかり（ハンガリー）」「阿蘭陀（オランダ）」「たあにや（デンマーク）」「はろにや（ポーランド）」「いたりや（イタリア）」「すらんさ（フランスか）」などが見られ、さらに「あうろば（ヨーロッパ）」もある。

(12) このような描写は鳳潭の『南瞻部洲万国掌葉之図』に従った。『南瞻部洲万国掌葉之図』の「キピラ」はマテオ・リッチの『坤輿萬國全圖』の北アメリカの太平洋側に描かれる「析未嶺」の仮名書きとされている。『鎖国時代日本人の海外知識——世界地理・西洋史に関する文献解題——』（前掲書、二六九頁）、室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」（『地理学史研究』第一集、一九五七年、一三〇頁）などを参照。なぜ北アメリカがヨーロッパのところに描かれるようになったのか、今後の課題である。

(13) 「日本國」の南にある島に書かれている「はくさいに」「きんかさいらうあ」「くわてきばはい」「ちろくこく」「長人國」は、鳳潭の『南瞻部洲万国掌葉之図』にある「伯西兒（ブラジル）」「金加西鑑（コロンビア）」「瓦的馬輩（グアテマラ）」「智勒國（チリ）」「長人國」のことである。

(14) 本図において「小人國」は、「日本國」の南方の「小人こく」、ヨーロッパの内の一島にある「小人」「西女國」の西にあ

る「小人国」、というように三ヶ国もある。

- (15) 庶民向けの近世世界図については、拙稿「近世庶民の「世界」像——節用集の世界図を中心に——」(『日本思想史研究』第四五号、二〇一三年)で考察した。

- (16) 本図においては、海の空間や大陸の山々が薄茶色に染まっているだけである。また、「唐土」「朝鮮」あたりの地域名の短冊は薄赤になっている。なぜこの二カ国のみ地域名が色塗りされるのか、今後の課題である。

- (17) 拙稿「節用集の日本図に表現される空間認識」(『歴史』第二二五輯、二〇一五年)。

- (18) 阿耨達池と無熱惱池の同一を語る資料の一つとしては、元禄(一六八八―一七〇四)期以降に度々刊行されていた『和漢音釈書言字考節用集』(『合類大節用集』)がある。その第一巻には「無熱池」梵云「阿耨達池」。在「香山南。大雪山北。周匝八百里。云々」(『西域記』)「(万延元へ一八六〇)年刊の東北大学附属図書館蔵本による」とある。

- (19) 『俱舍論』第二巻、仏教大系完成会、一九二九年、四一九頁。句点、訓点はそれによる。

- (20) 定方晟「須弥山と極楽——仏教の宇宙観——」(『談話社』一九七三年、二〇頁)、応地利明『世界地図』の誕生(日本経済新聞出版社、二〇〇七年、五〇頁)など。

- (21) 定方晟「須弥山と極楽——仏教の宇宙観——」(前掲書、二〇一二年頁)、応地利明『世界地図』の誕生(前掲書、五一頁)など。

- (22) 池を一周する四つの川の描写は『俱舍論』の注釈書に従う

ものである。例えば、普光の『俱舍論光記』には「一、^{ニハ}河^{ニハ}從^{ニハ}東^{ニハ}面^{ニハ}一^{ニハ}出^{ニハ}繞^{ニハ}池^{ニハ}一^{ニハ}匝^{ニハ}入^{ニハ}東^{ニハ}海^{ニハ}。二、^{ニハ}信^{ニハ}度^{ニハ}河^{ニハ}從^{ニハ}南^{ニハ}面^{ニハ}一^{ニハ}出^{ニハ}繞^{ニハ}池^{ニハ}一^{ニハ}匝^{ニハ}入^{ニハ}南^{ニハ}海^{ニハ}。三、^{ニハ}徒^{ニハ}多^{ニハ}河^{ニハ}從^{ニハ}北^{ニハ}面^{ニハ}一^{ニハ}出^{ニハ}繞^{ニハ}池^{ニハ}一^{ニハ}匝^{ニハ}入^{ニハ}北^{ニハ}海^{ニハ}。即^{ニハ}是^{ニハ}此^{ニハ}方^{ニハ}盟^{ニハ}津^{ニハ}池^{ニハ}也^{ニハ}。四、^{ニハ}縛^{ニハ}芻^{ニハ}河^{ニハ}從^{ニハ}西^{ニハ}面^{ニハ}一^{ニハ}出^{ニハ}繞^{ニハ}池^{ニハ}一^{ニハ}匝^{ニハ}入^{ニハ}西^{ニハ}海^{ニハ}。」(前掲の『俱舍論』第二巻、四一九頁)とあり、四つの川が池から東西南北に出でて一周してからそれぞれの方へ流れていくという。

- (23) 管見の限りでは、仏教系世界図において贍部林が描かれているのは重懷の『五天竺国図』(貞治三(一三六四)年作成)や宗寛の『五天竺国図』(元禄五(一六九二)年頃作成)などの早期の図にのみである。

- (24) 定方晟「須弥山と極楽——仏教の宇宙観——」(前掲書)、二三頁。

- (25) 応地利明『世界地図』の誕生(前掲書、五〇頁)。

- (26) G.メルカトル(Gerardus Mercator, 一五二二―一五九四年)の地図帳は一六三七年にラテン語からロシア語に訳された。地理書『コスモグラフィア』の七六章のうち、六九章はこの地図帳から引かれたものだとしており(Hikoniia Hapaxov. Пpеждисловие (ニコライ・チャリコフ「序文」) // Knura Kozmografyia 1670 (一六七〇年作成のコスモグラフィアと「序文」)。СІІІ, 1881)「メルカトルの著書は地理書『コスモグラフィア』の主な原拠となったのである。

- (27) M.ベルスキー(Marcin Bieński, 一八九五頃―一五七五)はポーランドの歴史学者であり、一五五〇年にはKronika

wszystkiego świata (『全世界の年代記』) という世界史書を書いた。この書は一五八四年にロシア語に訳され、地理書『コスモグラフィア』の原拠の一つとなった。

- (28) P. D. A. Harvey. *Mapa Mundi: the Hereford World Map*. Hereford Cathedral & the British Library, 1996.

- (29) Hironori Chapurov. *Ykaz. cor.*, c. 6-9.

- (30) 例えば、セビリヤのイシドールス(五六〇頃～六三六)の『語源』に見られるTO図には、「ASIA Sem」「AFRICA Cham」「EVROPA Iafeth」とあり、三大陸がそれぞれノアの三人の息子の領域とされている。イシドールスのTO図は Peter Whitfield *The Image of the World: 20 centuries of world maps* (British Library, 1994, p. 13)を参照。

- (31) 原文はロシア語であるが、本稿では紙幅の関係上、その日本語訳のみをあげる。以下も同様である。

- (32) 第四大州「アメリカに関しては、**■**方。第四大州は新アメリカという。近年、スペインやフランスの人によって発見された。「アメリカは」人が**■**盲で、金銀鉱石がある。この島々において、かの外国人は極めて豊富になり、町をつくり、この大州を新大陸と名付けて「知られている」三大州に加えた。」とある。一見では、宗教的世界観とは無関係であるが、地図の下に書かれる記述を見ると「多く〔の島々〕は人に知られないが、唯一の神様のみ〔神様の〕仕事が知られている。要するに、神様のみは慈悲のために、無からあらゆるものを創り、今でも創り続けて変化させ、〔世界を力——筆者の注〕広げている。また、怒りのために、破

壊して失墜させて無に帰させる。」とある。この記述からは、新大陸を含む全世界の創生はもちろん、アメリカ大陸の発見も神様の思召しによるものであったと窺われる。

- (33) ツアリグラードは、一七世紀頃までのコンスタンチノープル(現在のイスタンブール)の別称である。

- (34) シナイ山については「出エジプト記」19:1～31:18にあり、燃え尽きない柴については「出エジプト記」3:1～3:5にある。

- (35) 「出エジプト記」3:5、「聖書 和英対照」日本聖書協会二〇〇八年、(旧)一一六頁。

- (36) 神様がシナイ山に降っている間は、モーセ以外のものが山に登らないように次のように注意されている。「民のために周囲に塀を設けて、命じなさい。『山に登らぬよう、またその境界に触れぬよう注意せよ。山に触れる者は必ず死刑に処せられる。その人に手を触れずに、**■**で撃ち殺すか、矢で射殺さねばならない。獣であれ、人であれ、生かしておいてはならない。角笛が長く吹き鳴られるとき、ある人々は山に登ることができる。』」(「出エジプト記」19:12～13、「聖書 和英対照」日本聖書協会、二〇〇八年、(旧)一五二頁)。

- (37) 「創世記」2:10～2:14。ただし、そこにおける四つの川の名はピション・ギホン・チグリス・ユーフラテスとなっている。

- (38) 「創世記」にある「ギホン」とはナイルのことである。

- (39) 『ニコデモ福音書』とは、新約聖書外典の一つであり、「ピラト行伝」や後に付加された「キリストの地獄下り」などからなるものである。日本語訳は田川建三によってなされ

ている（荒井献・八木誠一ほか訳『新約聖書外典』講談社、一九九七年）が、それはギリシア語で書かれた最古の部分・「ピラト行伝」のみである。

本稿で語るセトの伝説は「キリストの地獄下り」の中の一章であり、後にラテン語版に付加されたものである（田川建三「ニコデモ福音書（ピラト行伝）解説、前掲の『新約聖書外典』、四八二～四八三頁）。セトの伝説は日本語訳にないものであるため、本稿ではロシア語訳を参照した。[Вангелие от Никодима (Никодемо福音書)] [Электронный ресурс] // Русская апокрифическая студия (ロシアの外典〔翻訳〕会) . URL: <http://apokrif.fullweb.ru/apocryph/lev-nikodim.shtml> 二〇一六年六月八日閲覧。

(40) ジャン・ドリュモ『地上の楽園』西澤文昭・小野潮訳、新評論、二〇〇〇年、七八頁。

セトの伝説というのは、アダムの三男セトが老いて病んだ父親に、病を癒す油を取りにエデンの園に行かされたが、禁じられたエデンの園に入れなかった、というものであり、人間誰もが楽園に入ることができないことは強調されている。

(41) 同上、六四～六九頁。特に注目されるのは、インド航海者コスマスの世界図（六世紀）である（ジャン・ドリュモ『前掲書』、六八頁）。「世界」の東方にはエデンの園があり、そこから四つの川が流れていって人間の住む大地を囲む大洋に合流した後、再びそれぞれの場所で見れる、という描写である。この地図は当時の「世界」構造の可視化である。

(42) 「創世記」29～2:10『聖書 和英対照』日本聖書協会、二〇〇八年、(旧)三頁。

(43) 本稿で取り上げている『南閩浮提諸国集覽之図』においては、「あのくだいけ」以外の「ヘカミの国土」が描かれていないが、日本でも山は聖なるものであり、ここという「ヘカミの国土」とも言える。これも、本稿で述べたロシアの『コスモグラフィア』に描かれる聖地としてのシナイ山と共通する点である。日本の山の思想に関しては、佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院、二〇〇九年）、同著『死者の花嫁——葬送と追想の列島史——』（幻戯書房、二〇一五年）などを参照。